淫妖の潜む街

（淫妖を狩るモノ）

妖怪あんかけ／ピクルス

＜淫妖の潜む街＞

　紗弥の住む■市●町は田舎ではあるが政治家の手腕で様々な活性化され利便がいい。

　便所は水洗、ネットも光ケーブルが張り巡らされ、どこかに行きたければ市の小さなバスが、山奥に点在する集落から駅や役所までへと、繋いでくれている。
　子供が多く、町に行き交う電車やバスには学生の姿がひしめいており、皆笑顔で、しつけも行き届き見知らぬ人にも挨拶を欠かさない。町の宝だと町民は誇る。

　少し前までポットン便所だった。廃村になるかと不安に思っていたと思い出して笑う町民、市民は今のこの市の賑わいをきらめく姿で見ている。

　そんな大人達とは裏腹に、学生たちには奇怪な噂が色々広がる。

この一ヶ月の真新しい噂だけでも多岐にわたり、やれ異次元人が攻めてくるとか、道路で突然悲鳴をあげて狂う怪事が多発してるとか、男性と手さえ繋いだことがない進学校のお嬢様が妊娠し、調べてみたらお腹にはなにもいなかったとか。
怪奇専門雑誌クーに出てきそうな話がてんこ盛りなのは、日が傾くとすぐに山影で暗闇に落ちる彼女たちの住む地域性からみれば、闇を恐れる怪奇情報に学生が夢中になるのは自然なことだろう。

噂を怖がり、笑い、タロットカードで占ったりと学生たちは不思議な現象に興味が持ちきりだ。

だが西ヶ花紗弥（にしがはなさや）はそんな噂よりも幼馴染みの田中敦（たなかあつし）に最近夢中だった。
紗弥と敦は小学校では毎日のように遊んだ仲良しだったが、四年の時に転校してしまった。
だがそれから何年かして、電車での通学中に偶然、敦に再会したとき、どれだけ嬉しかったか。聞いてみれば近くの学校で、運命の糸の繋がりに、赤い糸を信じずにはいられなかった。
敦の通学時間に合わせて電車に乗って駅で少しでも話ができれば、それだけでその日は一日天にも登る幸せな気持ちに包まれた。

問題は敦の登校時間に合わせるこの時期電車が満員になる。

近くに大きな工場が誘致されたのがその理由で、なんでも税金をゼロにしたので大企業の新工場がこの街に建ち、元の町民を遥かに超えんばかりの従業員と家族が引っ越してきたのだ。問題もある。電車が二両でその多い乗客数にまだ対応できていないこと。
おかげで都会ほどのラッシュで､息を吸うのも難しいほどだ。車内は冬とは思えぬほどにムシムシとする

紗弥はその日は気分が悪かった。

ラッシュだけではない。なにか獣のような臭いが満員電車に満ちている。アンモニアと大便と肉が腐ってウジがわいた時の臭いが混ざったような。
そしてその汚臭は徐々にきつくなる。思わずハンカチで鼻と口元を抑える。

だが周囲をみると皆平然としており、誰も臭そうな仕草をしておらず、紗弥は自分の行為が恥ずかしくなった。
確かに自分のこの行為を、臭いの主が見たらどれだけ傷つく

だろうと。(大人ってすごいのね)　紗弥はハンカチをポケットに戻し、口で息をするようにした。

　そんな中で感じた臀部に触れる感触。
　はじめは電車の揺れに合わせて触れる程度であったが、次第にはっきりと性的な意味を持つ触れかたとなっていった。
　発達途中の紗弥のお尻の曲線に沿って、手のひらで全体を弄られる。

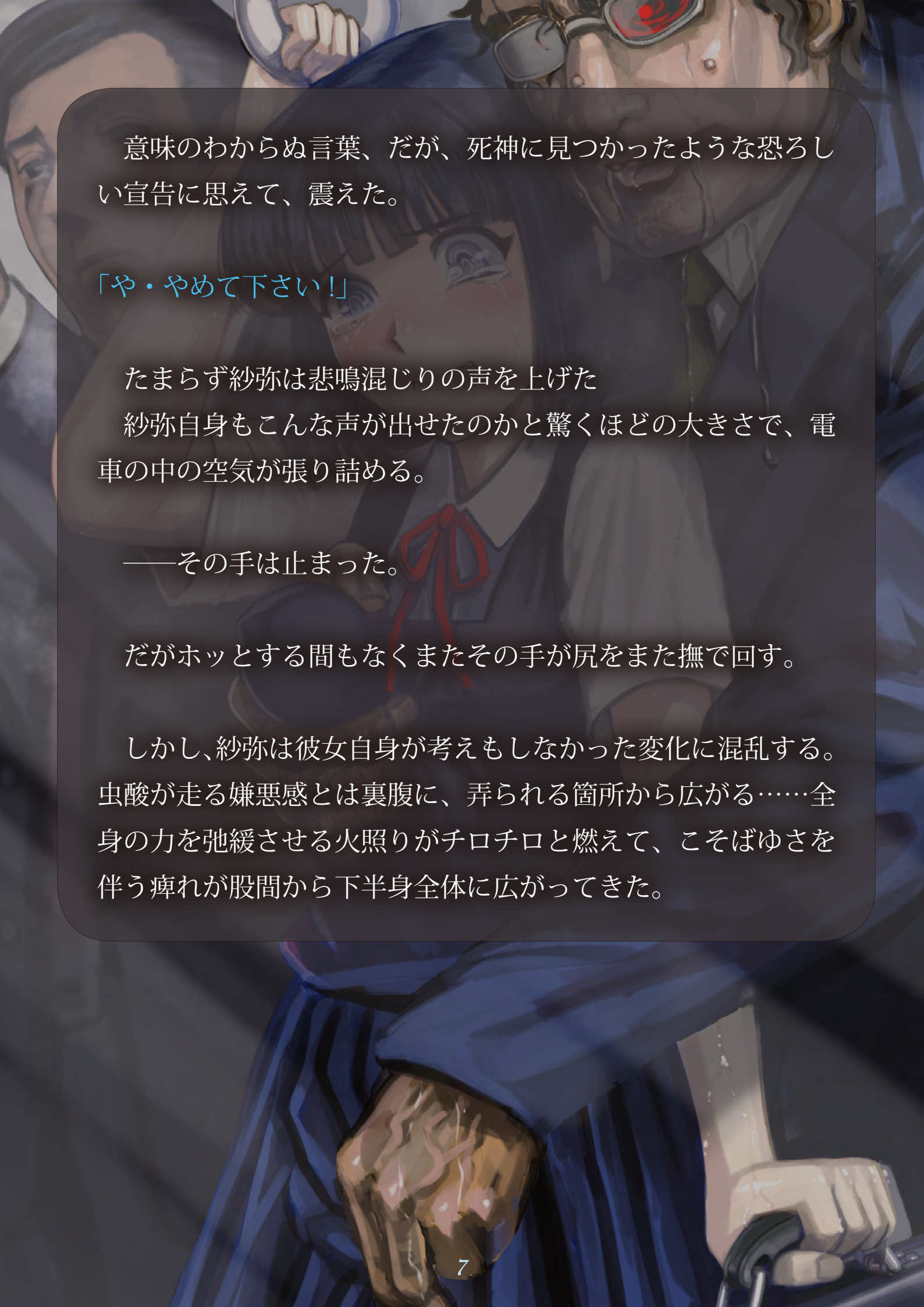
　ブシュー…ブシヒュルルル

　動物のような激しい息が耳元にかかる
　わざと空気を耳に当ててるようで、その息は行為に合わせて激しくなった

《 ゲヒハヒ……ブヒュルルル……アヒャヒャ》
笑い声さえした。

　汚物の臭いを吹き掛けられて嫌悪感に総毛立つ。そして
聞いたこともないすり鉢を擦るような底冷えのする声が、耳元で鳴った。

　　《 見ツケタゾ……巫女ヨ》



　意味のわからぬ言葉、だが、死神に見つかったような恐ろしい宣告に思えて、震えた。

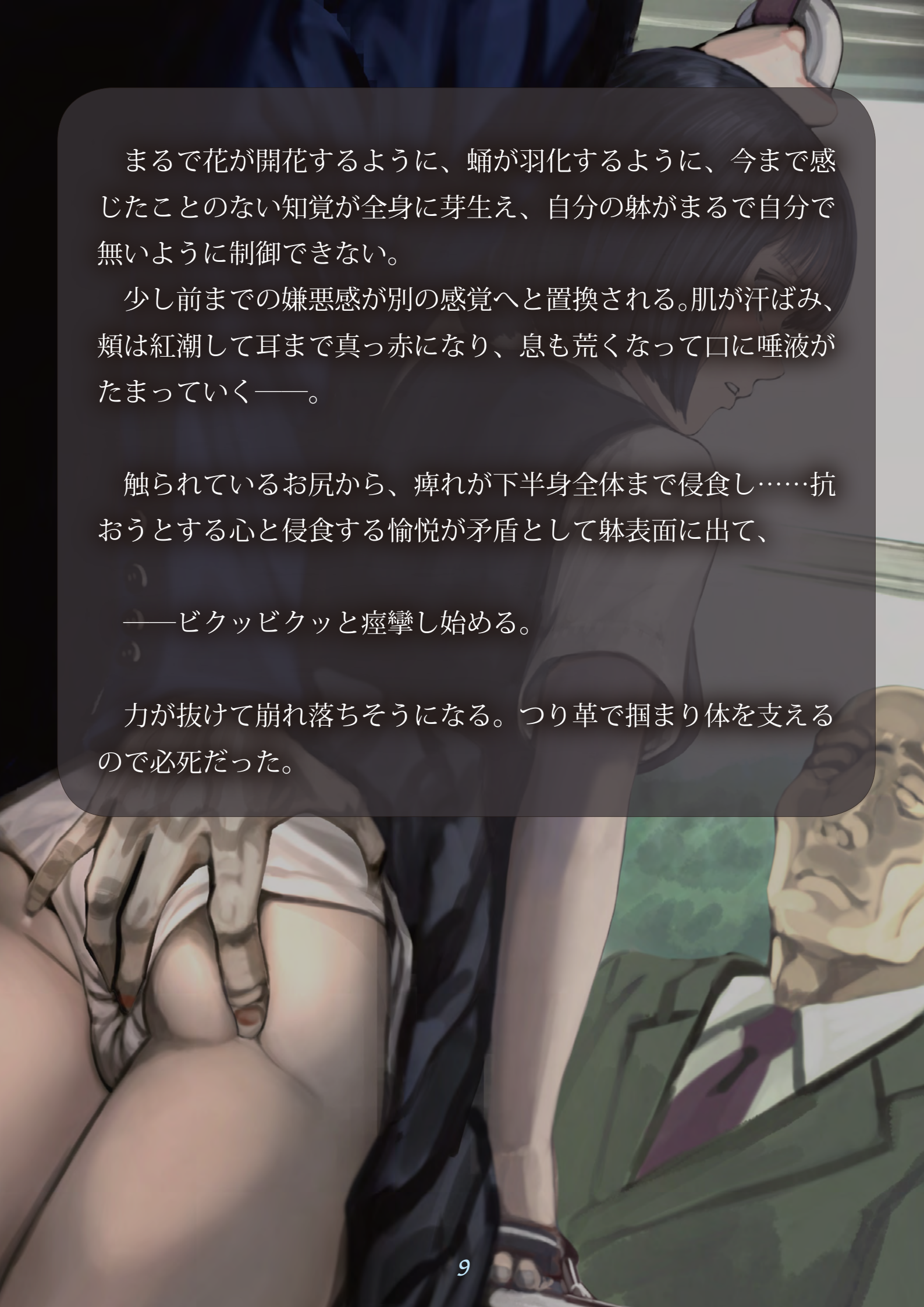
「や・やめて下さい！」

　たまらず紗弥は悲鳴混じりの声を上げた
　紗弥自身もこんな声が出せたのかと驚くほどの大きさで、電車の中の空気が張り詰める。

　――その手は止まった。

　だがホッとする間もなくまたその手が尻をまた撫で回す。

　しかし、紗弥は彼女自身が考えもしなかった変化に混乱する。虫酸が走る嫌悪感とは裏腹に、弄られる箇所から広がる……全身の力を弛緩させる火照りがチロチロと燃えて、こそばゆさを伴う痺れが股間から下半身全体に広がってきた。



　まるで花が開花するように、蛹が羽化するように、今まで感じたことのない知覚が全身に芽生え、自分の躰がまるで自分で無いように制御できない。
　少し前までの嫌悪感が別の感覚へと置換される。肌が汗ばみ、頬は紅潮して耳まで真っ赤になり、息も荒くなって口に唾液がたまっていく――。

　触られているお尻から、痺れが下半身全体まで侵食し……抗おうとする心と侵食する愉悦が矛盾として躰表面に出て、

　――ビクッビクッと痙攣し始める。

　力が抜けて崩れ落ちそうになる。つり革で掴まり体を支えるので必死だった。

「おいどうした、痴漢かい？」「誰だ！」

　顔を真赤にして涙を流す紗弥に、乗客も周囲の男たちに声を掛けあい怒号が飛び交う。

　だがその間にもその手の動きは全く止まらず、それどころか大胆になっていく。
　白の清楚な下着の上の隙間から手のひらが滑り込み、スベスベとした柔からな恥丘の下の双丘を揉みしだきつつスリットに指を差し込まれ　その奥に咲く花弁を直に弄られた。

「ハァ…ハァ……イ……ヤ……イヤ……ヤです……ハァ…ハァ」

もう虫の声ほどのか細い聞き取れない声しか発せない
紗弥の真っ赤な耳は熱く熱をもつほどだ。目から涙が溢れ激しくふいごのように小さな胸が上下する。足がつりそうに爪先まで伸び上がって、その指から逃れようとする。だがその指は中心の孔、処女膜に触れた。グッと押し込まれる。

（痛い……痛い！　ヤメて……）

その太い指先が電車のガタンガタンとした揺れで、処女膜の柔らかな肉膜を突きたわませ、ついに突き刺さろうとした。

――その時だ、近くで大声がした。

「お前だ！　尻を撫でまわしてたろ」

若いサラリーマンが、中年の頭が薄い眼鏡男の腕を掴んで上に引き上げる。
まさに今、彼女の性器内部まで指を挿入しようとしていたその手だった。

「さぁ観念しろよ、満員電車で逃げられやしないんだから」

　掴まれた乗客黒眼鏡の男はなにも言わない。だが、苛立ちを隠せない表情を浮かべると
歯を剥き出しにして唸った。

　歯をギリギリと砕かんばかりに左右に歯軋りさせていた。だが次の瞬間、唸っていたその黒ふち眼鏡の男の首が、ガクンと倒れた。白目を剥いて。――そしてそのまま反応がなくなった。

　腕を掴んでいたサラリーマンはさらに怒鳴る

「おい、こら！　寝たふりしてんじゃないよ。立てよ！」

　サラリーマンが怒鳴る。
　だがその男は揺さぶられても、その動きに合わせて首をガクガクとさせるだけであった。意識を失ってるとしか思えない。
　満員電車の人の密度で倒れないが、完全に反応がないままである。腕を掴んだサラリーマンは呆れて、どうしたものかと左右を見回す。
　紗弥はその喧騒のなか、過呼吸で朦朧としていた。

「オイ、この娘もあぶねぇぞ」「倒れそうだ」左右から乗客が支える。
「後少しで次の駅につくからな。しっかりしろよ」

　右の小太りのスーツの男性と左の若い男性がそれぞれ崩れ落ちそうになる紗弥を両脇か　ら支え、労りの言葉をかける。
　彼女は乗客の連携に汗を滴ながら細い声で礼を伝えた。

「すみません……ありが……とうご……ヒッ」
　だがその言葉が言い終わらぬうち、手が制服の下裾から滑り込んでブラごと揉みしだかれた。

　あまりのコトに何も言葉を発せず左右を見るが、その腕を支えてくれている乗客の腕ではない。紗弥の死角で見えないが真後ろから胸が揉まれている。

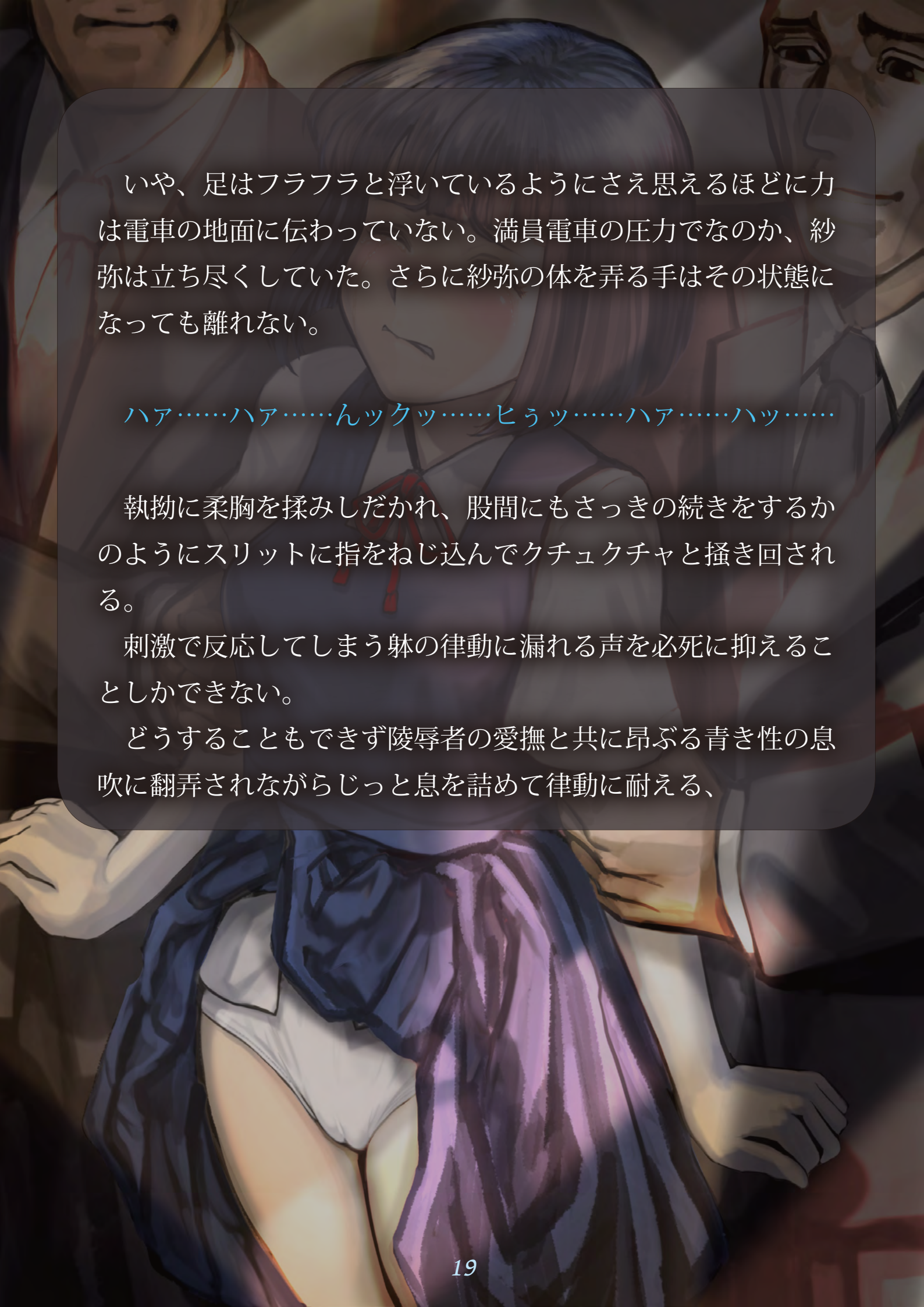
　だが、さっきの痴漢の男は意識を失ったままだ。

――二人目の痴漢。

紗弥は戦慄する。
しかも二人目の痴漢はさっきまでと同様に大胆に。柔らかな感触を楽しむように五指を別個に指の動きだけで乳を絞り出そうとする。
身動ぎして逃げようにも、左右の男に倒れないように支えられている為に拘束されているに等しい。

「あッ　あッ……はッ離してください！　イや嫌ぁッ！　お、お願い触らないで！」

紗弥はたまらず悲鳴を上げた。慌てて左右の男たちは手を離す。足がガクガクして力が出ない、定まらない。紗弥はそのまま垂直に崩れ落ちるはずだった。だがそうはならずに紗弥の躰は立ち尽くしたまま変わらなかった。



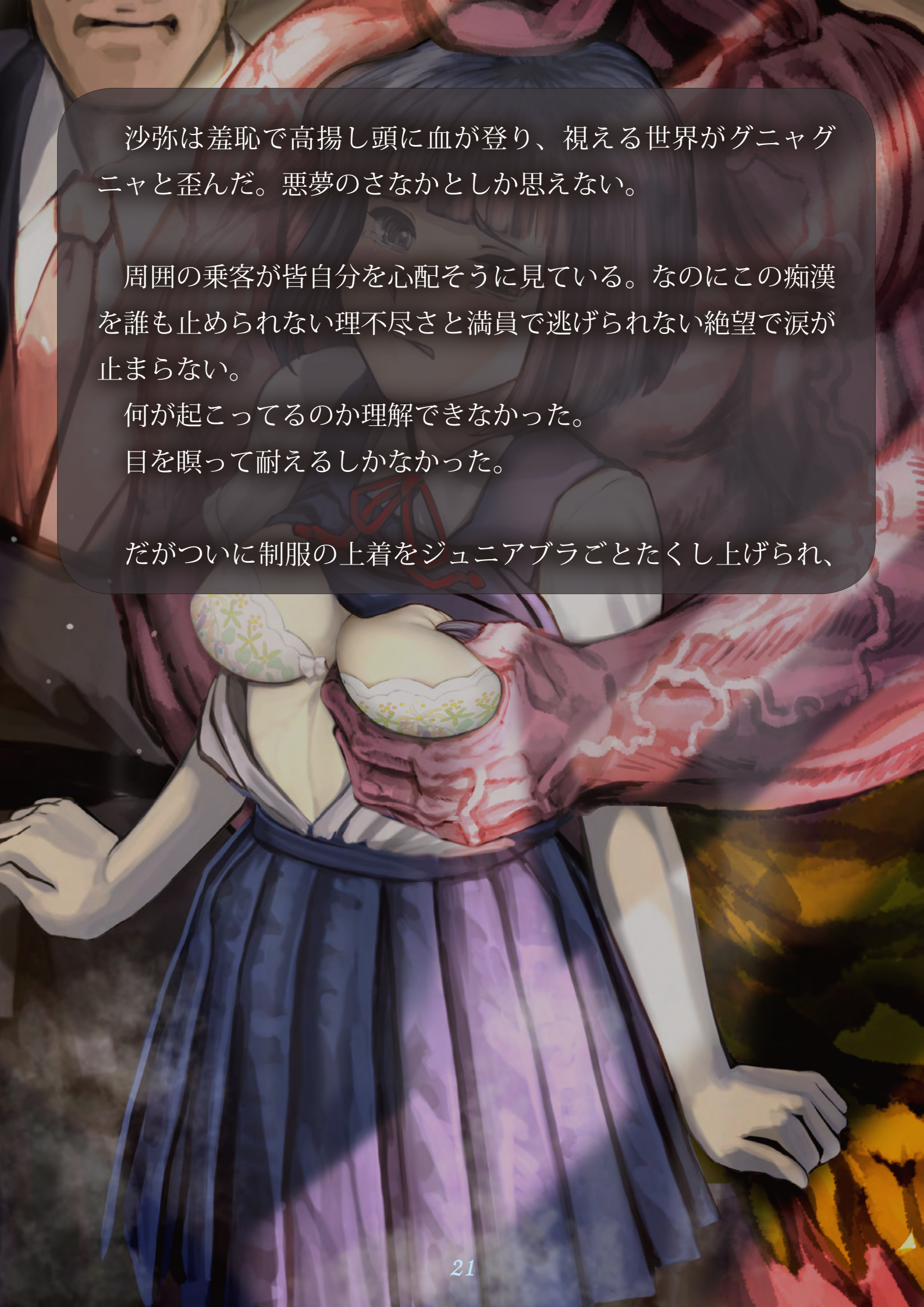
いや、足はフラフラと浮いているようにさえ思えるほどに力は電車の地面に伝わっていない。満員電車の圧力でなのか、紗弥は立ち尽くしていた。さらに紗弥の体を弄る手はその状態になっても離れない。

ハア……ハア……んックッ……ヒぅッ……ハア……ハッ……

執拗に柔胸を揉みしだかれ、股間にもさっきの続きをするかのようにスリットに指をねじ込んでクチュクチャと掻き回される。

刺激で反応してしまう躰の律動に漏れる声を必死に抑えることしかできない。

どうすることもできず陵辱者の愛撫と共に昂ぶる青き性の息吹に翻弄されながらじっと息を詰めて律動に耐える、



沙弥は羞恥で高揚し頭に血が登り、視える世界がグニャグニャと歪んだ。悪夢のさなかとしか思えない。

周囲の乗客が皆自分を心配そうに見ている。なのにこの痴漢を誰も止められない理不尽さと満員で逃げられない絶望で涙が止まらない。
何が起こってるのか理解できなかった。
目を瞑って耐えるしかなかった。

だがついに制服の上着をジュニアブラごとたくし上げられ、

プルンッと小降りな乳房が顕に揺れる。先端の尖った桜色の乳頭が、電車の窓から差し込む朝日に照らされて輝いた。

　沙弥は目を瞑ってこらえているため、胸がさらけ出されていることに気が付かない。
　その柔らかな白い乳房が乱暴に揉みしだかれ、更に絞り出し尖った先をベロベロと舐め啜り取られる

　チュバチュバッ　チューチューチュバッ
《 ゲハハハハハ……グゲヒハヒヒョヒョヒョッ》

（助けて……誰か……神様……こんなの嫌です）

　下品な音がして胸を揉まれながら何者かにしゃぶられていた。
　だが沙弥には胸から広がる甘い性の快感のさざ波で麻痺して痺れ、声を上げないことで精一杯で、シャブリ乳首をすすられ

取られ　　流が荒
れ狂っ

　股間　　に合わ
せてス　　大陰唇
からピ　　とした
濡れた
　沙弥　　擦を体
重で受　　芯を、
直接こすられてしまう。

　真っ白に頭が焼き付き失神しようとした時

《起キロ　　ノゾ》

　尖っ　　摘まま
れて、

「――

　ボーッ意識を失いかけていた紗弥は目を開き自分の胸を見
た。
　たくし上げられて幼い乳首が朝日で照らされている。ゴトン

体験版はここまでです。

製品版はPDF278P　(挿絵＋小説108P　CG集168枚(基本10種)
で濃密に楽しんでいただけます。
挿絵＋お話の前半部分をお楽しみのあとは、CG集の方でも
連続で見ると、執拗に性の愉悦で調教されていく様が
小説版の挿絵よりも多いイラストで構成されてますので、
CG集で二倍楽しめます。
ぜひご購入の上ご鑑賞ください。

淫妖の潜む街（体験版）
（淫妖を狩るモノ）Ver.1.31
妖怪あんかけ／ピクルス

Twitter:　https://twitter.com/youkai_ankake
pixiv:　https://www.pixiv.net/member.php?id=103204
Ci-en：https://ci-en.jp/creator/657
HP　画茶屋：http://pikurusu.sakura.ne.jp/o.html
pixiv ｖ Pawoo：https://pawoo.net/@Youkaiankake